

こせいてき 個性的なからだ

種類の多い甲虫類には、個性的なからだをもつものがたくさんいます。みんなちがって、みんなおもしろい。そんな虫たちを見てみましょう。

📷 オトシブミやチョッキリは、産卵のときに長い口をつかって、葉っぱをまき、つつのような入れものをつくるよ。24ページを見てね。

オトシブミ

📷 ゾウムシのなかまのオトシブミは、オスは首(頭部)が長く、メスは首が短い種類が多い。オスの首が長いのは、ケンカの道具につかうためだ。メスをめぐるって、オスは首をぶつけあって相手を葉から落とそうとするよ。

オスもメスも口の先はハサミのようになっていて、葉にあなをあけて食べる。



イタヤハマキチョッキリ

📷 チョッキリはオトシブミのなかま。触覚のある場所がオトシブミとちがうよ。

チョッキリは触覚のある部分より先が長く、木の実にあなをあけるときの、オトシブミより便利そうだ。



●へんてこなからだの甲虫たち

ベニヒラタムシ。からだがいちじるしく平たく、せまいところにもぐりこむのに便利。



トサヒラズゲンセイ。四国より南に生息するめずらしい虫。あざやかな紅色で、オスはクワガタに似た強力なあごをもっている。



ヒゲコガネ。オスは角のような大きな触覚がとくちょう。長い触覚でメスをさがす。

●もっと知りたい 甲虫類

甲虫類には、カブトムシ、クワガタムシ、ゾウムシ、カミキリムシ、オサムシ、テントウムシなど、種類がいろいろあります。ゲンゴロウもホタルも甲虫です。甲虫のとくちょうは、前ばねと後ろばねのかたちや、かたさがちがうところです。後ろばねはやわらかくて大きいですが、前ばねはかたくて、からだをおおうようになっています。だから、からだがかたくてじょうぶで小さくまとまっています。からだを小さくかたくすることで、せまいところやすきまにも、どんどんもぐりこんでいけます。木の皮の下や、土のかななどにもいます。

セモンジンガサハムシ

📷 前ばねが大きく、横に広がるかたちをしている。葉にとまっていると、からだはすっぽりはねにおおわれて、あしはねの下にかくれてしまうんだ。アリなどに不用意にあしをひっぱられることをふせいでいるのだからね。



ジンガサハムシはあしが短い。だから、はねの下にかくせる。

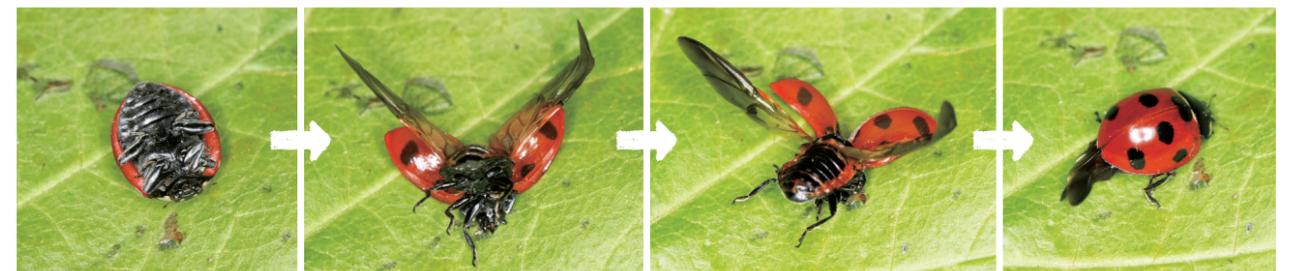


日本のジンガサハムシは、はねはほとんどどうめいで、金色にかがやく。この色は生きてるときだけのもので、死ぬと茶色になってしまふ。はねの内部や、はねとからだのあいだで光が反射したり屈折したりして出る色(構造色とよばれるまぼろしの色)だからだ。

ナナホシテントウ

📷 テントウムシはきけんだとわかったら、あしをちぢめて死んだふりをする。こうすると丸っこいからだの外には突起物はないので、アリなどにかみつかれるおそれもない。さらにつつけばころりと落ちる。落ちたときに、あおむけになってしまったら、ふつうの虫はあしをつかっておきあがるけれど、テントウムシはあしが短いのでそうはいかない。はねを開いてそのはねをじょうずにつかておきあがるんだ。ジンガサハムシも同じおきあがり方をするよ。

●死んだふりをしているテントウムシのおきあがり方



シロスジカミキリムシ

📷 体長が5cmもあるカミキリムシ。オスもメスもするどい大あごをもつものが多いけれど、とくにシロスジカミキリムシのなかまの大あごはするどい。肉食でないのにするどい理由は、木の幹のなかに産みつけられて育つため、成虫になると木をけずって外に脱出しないとまらないからだよ(2時間ほどかかる)。

📷 この長い触覚は太くてじょうぶ。あおむけにひっくりかえってしまったときには、触覚をじょうずにつかておきあがるよ。



体長の1~1.5倍ほどもある長い触角と巨大な目が目立つ個性的な顔つき。あしをひらいてとぶ。おこると、むねをすり合わせてキキキという音まで立てる。